

いわんや悪人をや

辻 憲男（文学部教授）

いったい何を求めているのか。横川（よかわ）での厳しい修行に耐え、19歳の親鸞は聖徳太子にすぎた。夢で己が命数を知った。十年後比叡山を下り、京の六角堂にこもって、95日目に何ともふしぎな夢を見た。“欲の生じた時は観音みずからが現れてその苦を受けよう”とのお告げだった。決心して法然の門に入ったが、やがて師とは別々の地に流罪になった。妻子とともに長く常陸（ひたち=茨城県）に暮らし、もっぱら布教に努めた。京に戻ったのは60歳を過ぎてからである。しかし後年、関東で紛争が起これ、不幸なことに、子の善鸞（ぜんらん）を義絶する事態をまねいた。

倉田百三の戯曲『出家とその弟子』はもちろん史実の通りではない。作中の善鸞は父の教えにそむき、今は邪恋墮落の日々を送っている。親鸞の愛弟子・唯円（ゆいえん）は父子間の信頼を取りもどそうとするが、今度はその誠実な唯円が「かえで」との真剣な恋に落ちてしまった。「私を善い女になれるように、導いて下さいな」「そうしなくていいものですか」「私は何だかうれしくなって来ました。本当にいつまでもあなたのおそばにいられるようにして下さいよねえ」「きっとそうしますよ」…。

百三自身が、恋愛と家族問題に苦しんだ。若くして病に沈み、須磨や明石に来て療養したこともある。親鸞や唯円の苦悩は、すなわち百三の青春にほかならない。「善人なおもて往生を遂ぐ。いわんや悪人をや」とは、唯円の親鸞語録『歎異抄』（たんにしょう）の有名な一句。この「悪人」は極悪非道の人を言うのではない。煩惱と迷いのさなかに生きるわれわれ凡夫（ぼんぷ）をさすのだという。



親鸞上人の誕生地は京都市伏見区日野。法界寺にて。